常山紀談

二十三

和書門
類 四三〇一 號
函 二三九
架 二
冊 一七

内閣文庫
和書
類 四三〇一 號
冊 一七
函 一七〇
架 八

第

内閣文庫
番號 和 42301
冊數 17（10）
函號 170 49

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

常山紀談巻之二十三目次

一 直江山城守閻魔王小書を贈て訴訟人を斬る事
一 安藤直治紀州打の刀を成瀬に成て贈られし事
一 土屋數直執政の事 并土屋忠直成立の事
一 塚原卜傳剣術鍛煉の事
一 東照宮松倉市橋堀丹山別所五人へ御遺言の事
一 魁斗越前組下よ慈愛ありし事
一 鳥丸光廣卿行狀の事
一 中院通村公江戸にて和哥を詠ずる事
一 本多忠義書籍評論の事
一 義經の鞍の事

浅草文庫

一 根来法師賞功の定 幷 大沢仁右衛つぶ事
一 大音左馬助 先登を論ずる事
一 永田治兵衛 功名の事 附 樫井合戦の事
一 於萬の方塙図右衛つを扶持せ〳〵る事
一 奥平家の士 妻髪を切く節を宮〳〵事
一 優婆塞 馬の事 附 信玄馬を擇ぶる事
一 森寺藤左衛つ 池田家奥立の事 幷 森寺政右衛つ武勇の事
一 伴玄札殉死を止る事
一 番大膳二條城へ使ひ参る事

常山紀談巻之二十三

備前國　湯浅新兵衛元禎輯録

○上杉家ハ三寶寺何某といふ者下知の罪有て誅せらるを其族大ひに怒り死〳〵る人を帰しつかはれと直江山城守ハ訟へ其下知の死ハ及ばざる事ハやみぬん直江白銀二十枚あゝて跡をとゝのへとゝのゝめ給ふ共用ひず是非ハ帰しつかはれと直江を催促しつゝ直江さはぐ〳〵いへども聞入ず其時直江もつ〳〵ば訟の如くせんとて一族三人捕へさせ地獄ハ切て迎へ来たりて書簡一通封じて使ひ往けりて首を刎させて其書簡ハもつ〳〵の子細ハて三人迎ひ来るべきとく帰し生とをつりゆへ慶長二年二月七日閻魔王冥官披露直江山城守

兼續とぞすゝめける

○安藤帶刀の子を飛彈守直治といふ成瀨隼人正正成或時直治より紀州へてきゝひゝる刀を乞得しゝ後より成瀨彼刀の事を偖アゝく尾張へて死罪人のゝを試ゝるゞあゝるよく切まさんき能出來ゝるゝ殘多ゝ又きゝひ直させくまゝりゆへといふ安藤安き事なり紀州へて心よく切まゝりたあゝき事よといひゝふ成瀨打笑ひ紀州ふく心よう切まつるゝ尾州ふて然らざるハ尾張の人骨堅きゆゑとなるゝれゝよ安藤守も あんだいやく尾張の士れ脆の弱き故なり鉛刀なれも紀州へてハよくきれゝと答へゝり

○土屋但馬守數直執政ゝりし時金座の者ども相ゝりく金を銀を入てふきくらまゝるのバ日本國の金甚多くなるべし金の色ハ損ぜるのゝふく莫大の利なれども但馬守用ひられ但馬守ゝゝ此事を内入らまゝるゞ事行ハるべしといひるを數直よりも人あり鬼角の答なくく折ゝられゝるバ又人をして問せゝふ但馬守是ハ邪なるゝゞなり金を以く天下の宝とゝるハ純物なるゝゞ故なり其宝を悪くせんとや思ひもよゝぬ事なゝといはれゝるとぞ數直

大猷院殿の近習ゝ仕へゝ

大猷院殿

ゝれり比ゝ思有くく咎をゝゝりし引籠ゝくく有しゝ

上京ゝくゝり數直密ゝ上京せゝれしを親族家人相止ゝ

ゝまゝても内入ゝ京ゝ思ゝくかゝもゝある所ゝかゝれ居ゝゝ或時ゝゝくの事を數直ゝとゝゝゝべしと仰出されしゝゝば皆

駿きて数直ハ江戸よりいふとゝれバ関ゝ召寄ゆて見
よ居ざる事ハあゝじと仰られくるゝちぐよこゝうこゝ出ぐるる
小東の京よかゝれく有ゝを頼く召出ゝて仰ゝ汝よくこゝ
来ぐゝれ来らぐハよろゝなんやゝく命ぜゝれくる事どもあり
泰平の時といへども千里の行程歩やとゝうゝぐる事なりと
思ひく後の咎を顧ず忍びく上京有ゝふ必ゝかゝあゝんと
ありゝめきゝ明智の表慮君臣水魚の遇季世よ有がゝ記
ゝあゝるあり此数直ハ甲州武田家ゝ士大将土屋宗蔵昌恒
ゞ孫なり勝頼亡ゝ時宗蔵ゞ子の二才よちゝゝと駿河の富
の裾野ゝ寺よ土屋ゞ相知る僧有く隠ゝて育くゝ
東照宮御狩の時彼寺よ立よゝせゝひゝふ御茶をさゝげく

出くるを此子ゞたゝまゝひ唯者よあゝじ父ハ何者ぞゝ御尋
あり住持の僧氏もゝ記者よてゝとかゝゝやくれども再三詰ゝ
ゝへバ御敵をなゝゝゝゝ者の末よてゝ隠ゝ頼ゝれくあれよ
存ゝひゝゝゝ育てゝく謹ゞゝくれバ出家せんよりハ我ゝ得さ
せよゝ仰ありくまバ今ハたゝてあゝうなんと思ひてこれ
ハ武田勝頼ゞ供ゝく天目山よ死ゝゝゝ土屋宗蔵ゞ妾腹
の子よてゝゝゝくまバさゝる義士の子なりくるよ眼ざゝの
なゝゞゝゝあゝめと思ひさゝふ罪ゝく当ぶハざりくりとて召
具せゝれ後民部少輔忠直とゝひゝハ此人ゝ数直ハ忠直の次
男なり

○塚原ト傳ハ常州塚原の人なり父を新たゝゝとゝゝト傳剣

術と飯篠長意と称し古く伊勢の國司より仕へ剣術を以て名を
得光源院殿の師なり其後上野の上泉伊勢守と云ふ剣術者あ
り上泉ハ新陰流の妙を以て傳ず上泉ハ弟子の中より勝
れたる者ハ一の太刀ハ極意を授くべし人も思ひなる彼弟子
或時道のなりふつなぎなる馬の後を通りなる彼馬ちゆく
ふひらりと飛のきく身より中らざる見し人さらふ塚原
が弟子の中ハも勝れたるよといひ違ひなるとあて下傳
より極々ふと傳大ハ驚きてさて一の太刀さづくべき器にあ
らずといひなり諸人此事を不審しく試よとく類なきさ
程馬を道のかたへよつなぎと伝を招くかたへよりれく見
居なりふと傳馬の後と除く通りしあ馬をゆんともせず

人々なりふとびなれバ後ハかくと語りさて彼弟子の早
なるをあやまりぬハ如何といひなるバト傳ハさればよ馬
のなかふ飛のきなるハなるハ利なるふ似なれども馬ハなる
ゆれといふ事をなるれくうと通りハなるなり飛のき
なるハ仕合とあるものと剣術も時ハより下なるとも仕合ハく
勝事あるべしそれハ勝なるとも上手なるハいかべるるべ只先ハ
なるれば機をぬるねをよしなるするなり一の太刀ハ位ハ及ハざる
事遠なるべ答なるきと答へしとぞ

○東照宮御病気重きなる及ハく　台徳院殿もかたへよりビ
なれ純帳のきハよ松倉豊後守重正市橋下総守正總堀丹後守
直倚来山左馬助別所孫三郎を召き此五人忠あるなり旦

大坂大和口ゆく武功ありよく　将軍より仕へ奉まと仰られ
〳〵うば皆涙を流し〳〵くゝ只〳〵かくの詞ありける時又別所ハ禄少
〇されども此後も取りけ忠あるべきものあり大和口よりやはき
言をいひ〳〵と仰せ給ばバ別所泣沈てゐり此ハ大和口みゝ
城兵引〳〵へとて追討ざり〳〵時別所諸大将の前より馬を乗ゆ
先年筑紫より鴻津が退口を尾藤が慕ハざり〳〵と太閤怒ら
まゝ只今追かくべき図をもづるの無念ありかくやはる孫三
郎ハ馬一匹ある歯をかむぞりなりいふ人〳〵かくハ腰のぬけ
〳〵やと大音より呼ハる此事を聞〳〵召ての事なりける
〇鮭延越前ハ寂上義光の長臣禄一万五千石あり寂上の家亡て
後流落〳〵るふかまり家人より慈愛深り〳〵人にて士三十

人附従ひ各乞食〳〵岩ハんといよ土井大炊頭利勝五千石与へ
ゝゝハ二十人の士より五千石皆あゝ〳〵各二百五十石あり其成ハ
二十人のゝ〳〵より一日がゝりより岩ハまて〳〵一生を終まり越前死
ゝゝバ二十人の士大より愁傷〳〵〳〵一字を建立て今下総の古河
城下の鮭延寺ゝゝ

〇烏丸光廣卿ハ常の居間より書物を繙きゝ〳〵四枚のふすま二枚
ひ〳〵た机一脚より硯あり〳〵三本入の扇子箱小筆あり其間り
年月経て人の入事なし故より座〳〵あ〳〵行〳〵其外ハ塵
満〳〵り公宴参内の時も扇ふおふ硯石を入ゝゝかさげ乗輿
より入らゝゝり此卿江戸より召ゝ〳〵三年ゝゝ高倉屋敷より有とゝか
〳〵〳〵帰京あ〳〵きり〳〵聞ゝゝるふ兼て座敷の前より庫有〳〵を

留守よおくまて雑掌いひるハ公久〻く江戸よおそく廣
き所よなきまゝひ帰京の後此庫目前よ有くつうらなんとそ
壊ち寺ゝ庫よハ数十年諸家より贈ア〻物を積るあり
其物ハ書院よなゝべ詳よ書記〻く家人よ分ち與へゝかく
て光虔々帰京有て程經〻うども庫の事ハいひ出されぢて雑
掌庭のさはに異ちるゝやといひふぐふも廣くなりぬ庫
ハいゝよ〻〻るやと問まつふもゝ〻〻ゝ内の宝物ハい
ふ〻〻ると有〻ふ皆くだゝ与へてんとそれハ減ふよあり
多ア汝ハ何を得るやと問まそれバいや一種あゝぶといへば
無調法の事ゝれと打笑ひくゝうあんもせゝまぢゝ〻ぞ君
臣禅理を好まれ〻あゝうとゝや

○大猷院殿の御時中院内府通村公御不審の事ありく江戸南
光坊よゝぢゝゝ三年ゝ〻ゝ〻ゝるが秋月をかんく
やくかゝふ月をバさゝて那なくの秋月ゝとゝ〻ゝの月
と詠ぜゝれゝを僧正感吟よ堪ぢゝく　大猷院殿よきゝれ
〻ゝは三年の逗留旅情さぞあゝん今ハ帰京ゝんと仰せさま
て内府京都よ帰られゝゝり

○本多能登守忠義或時近習の人よ近きゝゝ世よゝてゝあん
書の事を問まつふ平家物語評判ゝ事をゝ者ありそれハ
誰ぶ著〻ふやと問ふ由井正雪ぶ作ゝんと答ふ忠義ゝ
書籍ハ賢人君子の著ゝなるふゝゝゝるふゝて崇む事よハあれ正
雪ハ大悪逆の賊ゝよも正ゝ事ハあゝゝド其書籍ゝも減

そもそも覚ゆ人を以て言をすべしといふるのあれども分る凶
賊の何条よき言のあるべき汝等よく〳〵心得よといへれり
○鷲須賀阿波守至鎮古戦場の事跡を訪ひ古き物のすべて
を求められしに八鴻の軍より義経の士佐藤継信を葬るる時
最愛の大夫黒といふ馬を聘ふせ〳〵まして其鞍志渡の寺に有し
を彼寺より破壊し〳〵を修補し〳〵鞍を乞得て其後年久
〳〵ちり〳〵庫を引る人〳〵其事の由を聞て他の鞍
の中より〳〵重て程経て上田半平安重と〳〵いふる駆法の
上手あり其比半ばひるる悪馬の有て人々乗煩ひしに上田
此馬よりよい鞍重て乗しばよかりしといひしばあるる
此鞍を出して見すれば上田いふき鞍を取出して見て
して彼馬よりもせて上田をそもむき何条鞍に故あるべき
いざ乗よとて〳〵小三浦次郎右衛門といふ鉄炮をあつ
り〳〵人年老たれども此を見物に出て久しき名物の判官殿鞍
を見たるよりいひしば其故を問て答ていはく悪馬もりて
より乗得られて上田が駆法いよ〳〵名高くなりぬ
○紀伊國根来谷の法師ハむかしより武勇を好む定て〳〵る
法あり〳〵第一の功名より感状に玳瑁の鎗三本銅銭三十貫其
次感状に鎗二本銅銭二十貫其次〳〵感状に鎗一本銅銭十貫文
根来の内に大澤仁右衛門といふる者一番鎗を合せる感状に鎗銅
銭をも添てうけ得しゆ大坂にて秀頼に従ひ城落て後九鬼乃
家に有しゆ大坂竜城の人禁錮せられを土井利勝ひそか

やりあひ置まいらせり

○加賀利常に仕へし大音主馬助は若き人にあまさいふに大音心をさけくハりんされども今ハかゝる事叶ふまじ麒麟も老ぬればといふ事ハいひ出されたれども主馬聞て五町十町かけ走るも敵の真中には只一人かけ出る事なり易き事にあらず早く走るされバとて何のみ益なきなり先にかけ行人あらく後につゞくなるまじきバかりの老人も徒らくべし鎗あひハ僅六七間にあるべし主馬が如き老おとろへたる身も其時心剛なるべし然れまで五町十町ちかしる事ハ若き人のなし易き事なりとても六七間のきはまりに至りて箭玉もなげられバ若きとても走られねものなりといひしに皆閉口なりけり

○永田治兵衛ハ平生多病なりしが何の用にもたつべきと人のいひあざけるに下部にてハ健なるがよけれ士ハ義と勇とにありといふ諸人をせんなきことゝていふ詞ありしが嘲りけるに泉州樫井にて淡輪六郎兵衛が首取て旗本にて平生多病の男かゝるふるまひしけるに無病の人たち今日功名なくしやといふに答る人なかりき又上田主水ハ宗古といひしが石田に與して浅野幸長にあづけ置れしが茶の湯をもてあそびけるを殿の國にて大なれ一萬石の茶湯法師を召置れたりと譏りけるをに幸長聞て上田に脇差を与へ汝を譏る者ありと聞く必ず大切の時に功名ある心得あるべしと詞をかけられしは上田事に臨て刃に血を涂やさんといひしをまつて鼠の血なくしては

ばけ得ざといひるるが樫井ゆく目を驚かん軍しく討死る
首を提げ幸長の日出れ王子の陣に至りく士ひしく幾らも
並居しるるみふく茶湯法師ゑおくらまくくよといひるふ
しかくいつ人なりるるる
樫井の軍ハ大坂夏の事ゆく大野主馬大将にて塙団右
衛門先陣して和泉ゑ攻入り岡部大學塙が武功をそる
く接げくく阿波路をさくく進み行四月二十
八日夜明く國府の東れ山に烟のうへを岡部が士どもハ
や相図の火れ見ゆるといふみ蟻通明神のほより見塚さ
して進み行浅野長晟ハ信達ゑ陣せふ大坂より大軍
よりるる吟樫井ゑ引返るを塙我行く敵の体ゑて本陣

とて唯一騎淡輪六郎兵衛といふ案内者を引具して池辺
迫小岡辺をえつけ塙馬の上よりぬけがけるるるよな
今朝よりの軍を吟んと罵る岡辺敵あるれバ功名もあるとふ
互ゑ相罵りそるがあれあるる安松を焼拂ひさくバよかりなん
又蟻通の松原ゑ伏兵あるん覚束なれゑ後陣のつぐくを
吟るんるるく物見を出れ長晟の士大将浅野左兵門佐安
松ゑ来りく亀田大隅ゑとく兵をあげられたといふり又
塙が物見兼帰りく敵近くるんといふを岡辺少く曽を取
く名馬ゑ乗りて鐙を合せくかけ出れ塙いるる後陣を
吟るるるよといへども耳ゆも少入ず塙怒く汝ゑ先を駈さ
せんやといひく是も馬を急出れ兵四ハ殿して引退く本

透間もなく追懸さうり大隅ハ討死までよと思ひ定めて石橋よりく十文字の鎗を揮つゝ待うけさうゝゝ浅野左兵門見て何ゝて軍さるるくせんといふすぞらく引退れよといふ上田主水ハ揮井の家老かゝれ居たるをやり過ゝ後ゝ居ゝゝ淡輪真先うけくゝもせ入るをみを永田治兵衛討取さうかゝゝく大坂方をせよすゝ憂を上田主水鎗を提ゝく散ゝゝ相手さうひ山掛三郎左兵つとゝゝゝ横井平左兵ゝ援関新三郎かけよりく山掛を討とりぬ亀田を始とゝゝく殿の者ども面もふゝぶおめたさうんで相戦ひゝゝ大坂勢敗北さ塙ハ田子助左兵ゝ射ゝる矢のふ痛手を負て十文字の鎗を取のべ田子が弓の弦を突切る八木野左兵

もろさじ走アさゝゝゝバ塙家の壁ふゝゝれて思わず働たく終ふ討死て大野ハ見塚ふく先陣の戦をやかけむ入ハ揮井の軍ゝゝゝり又一説ゝ浅野但馬ち長晟紀州をあ立五千の兵ふく泉州市場ゝゝゝく大坂より四万ゝて向ふと聞浅野左兵門敵ゝづくふ向ふゝも市場表ふく一戦せんとゝゝ亀田大隅後の勝ゝて大事なれ四万の敵を五千ゝて支へん事ゝ地利ゝよゝゝゝ一里引退く蟻通明神の松原を前ゝあゝく安松ゝ先陣を押出ゝ敵を引付八町ゝゝてをゝり引ふ揮井ゝて孤ゝん此所松原ありく敵ゝよんもゝさゝれゝで八町なゝてハ双方深田ゝて一騎打ゝゝゝバ多兵かゝうゝゝ然らバ一騎合の勝負ゆく必定味方の勝利ゝゝゝゝゝ浅野ゝて

敵の旗をぞんに見ぎりく北んるべうべし亀田ハ引まぎきとい亀田我此所にて功名を遂ぎハ討死せんと
誓言して出陣しまバ桶井に於く一番鎗を合せるら討死
ク二ツの中を安びちうて一戦せれよ必敗軍なるべしとい
浅野怒く物前に不吉の一言なりと罵りるを浅野左近
ちうあつらひ所詮但馬守の下知まちせよとて前田越前を
以く事のよりをやれ長晟両人の存る所尤なり亀田々ぞく
武功おそれの物しるまバ先陣五千の下知ハ亀田心のまゝふせ
よと下知せらる前田帰りく斯とゝへば亀田涙を流し悦び
ゝり軍兵を安松に引とるまよ浅野左近同日向安井喜内
田子助左衛門伊藤金左衛門多賀ひとり安松の長滝村に陣

市場に残る浅野左衛門同大炊仙石因幡三木小左衛門未明に
安松まで兵を引取りまぎども陣せべき所なく桶井に入く
半ハ河原に陣しゝり大坂の軍ハ瓜生野ゆく勢櫛ー先陣
塙團右衛門二陣岡部大学なりしゝ二人不和にて塙に先ぶ
進ぎり四月廿九日泉州貝塚にて兵粮ぎふ大野主馬ハ酒宴
して打立ぎ其時塙ハ三百計の兵ゆく安松にて也入火を
かくる亀田ハ蟻通の小へ物見に出る所小浅野左衛門乗来る
汝ぞんりりし所甚感ぎ入さりといふ亀田物前の積り違ぎる
事ハ珍しゝざる事なりしといふ旗本の旗色ぞこうたり
直さんとゝへぎ左衛門ぞんりて乗戻るかゝる所に上田
主水来りく今日の合戦いかゝとゝ亀田昨日討ぎしめく

樫井よりて軍をべーとらく旗本の旗色悪くて色なるなり
乗帰るとく直されよといふ上田乗帰ると旗色ひしくと成り
より亀田其後上田を殺じくるハ此事なり亀田ハ南の町
をづまをを左の池ハ堤ゑ鉄炮五十挺ふせ馬より下りて立敵
を待やよ敵かけ来る亀田ハふたごゑ引付下知して鉄炮を
揃すふ生死ハ志ゑ騎馬の兵三十騎ばかりうち落せて敵
是ふためらひまふ鉄炮ゑ茶ゑみて一町ばかりもひきたり
かくのごとく三度くり返しかく樫井の町ゑ引取馬を立並
べく休ゑ居ゑりかゑ慶ふ敵味方ハ志ゑ東の河原より
歩立の弓ハ者をひきみゑ大将馬ゑく乗来ゑ亀田河原へ
乗出ゑ是ハ大坂ゑく雑の陣ゑくゑふと向ふ岡部大学と

名乗て馬上ふく鎗ゑけふ来ゑ時大学馬を引ゑへゑく小ゑ
向ゑく引退く亀田きゑまゑ返せと呼ばり一町ばかり追捨て
樫井ふ向ゑくゑふく討死までゑと獨言ゑく石橋ふ腰ゑけ
十文字の鎗をとり鉄炮の者をあつゑふちらゑふなり
唯三人ハ者と止りぬ三人亀田ゑ前ゑ来て腰ぬけども足まと
ひよなゑれ落ゑゑことよゑまとて少ゑもひるゑまゑ亀田大ゑ
賞ゑとゑふ上田一騎乗来ゑり先ゑ鉄炮の音ゑくゑふなゑく、
もゑゑれゑるよといふ亀田ゑまゑく我と法師と二人討死ゑ
ゑゑバ屍の山をもなゑべゑ但州公ハ琵琶ゑけを越ゑ勢
ゑひ自害ゑゑとゑふハ誠なりや敵進ゑ来ゑもゑゑ一
時ハゑんとゑふ慶ふ一騎ハ赤くよゑひ一騎ハ二三間ゑれ

さるが黒くよろひ〳〵る老かけ来る赤き物具ハ塙黒き出立ハ
塙が手の者あり塙ハ亀田ゟ向ひ塙が従者ハ上田ゟ向ふ亀
田立上り飛出さく鎗組さり敵の鎗亀田が曽を二打三打うち
変を十文字の鎗ゆく胸板又左の脇を突くつさ伏亀田が
士菅野兵右衛つ来く首をとる敵伏ぬ〳〵菅野が足を切
拂ふ菅野加右衛門助け来り塙が上へ乗うり兵右衛つ首
を取せぬ上田ハ鎗を折折無ると組うるを上田がゟれ
者二人〳〵すけ来り〳〵敵をうち取上田ハ痛手おひ〳〵り
亀田ハ抜進み出十文字の鎗を足まて踏直し居るを
又敵一騎かけ来り鎗を合て菅野加右衛つ鎗ふて脇つが
を突須田作兵衛其首をとる差物ゟ谷下吉左衛つと書さ

と此時敵一人来り〳〵亀田ゟ向ふを突拂ひ〳〵り大坂方
ゟ〳〵がけして先陣の大将討まつ〳〵ば敗北し〳〵り
東照宮も亀田が此日北軍を付ふ和めさせのふと云へり
亀田ハ父を溝口半左衛つと柴田勝家ゟ仕ふ大隅若紀
時ハ半之丞といひく十六の時初陣なり〳〵が柴田伊賀
守ゟ属し〳〵越前白鬼戸女河原ゟて白木戸馬上の敵を打
取柴田父子感状を与へらる又越前九岡の城へ一揆押寄
〳〵る時も功名あり志津ケ嶽の軍ゟもよい首取〳〵り後
浅野家ゟ仕へ小田原山中武蔵忍岩槻の城攻ふも度〳〵
功名〳〵り〳〵まバ秀吉ゟ賞を〳〵る文禄年中朝鮮
村山ゟて敵六騎と馬上ゟて太刀打〳〵一騎斬〳〵落〳〵其

首を取るまゝに幸長感状を与へらる慶長五年濃州合渡
にても功名し瑞龍寺二の丸に先登し度く武勇誉まゝ高く
なるまゝに京都に帰る　台徳院殿御前へ召出され亀田が働
を賞ぜられ御腰物を賜はり上田も同じく賜物
あるべき筈なりし亀田後安藝東條の城主となり一万
五千石を幸長あゝへらる子細有て浅野家を去高野山
学侶花王院のもとに隠れ寛永十年八月十三日卒しる
とぞ

○紀伊大納言頼宣卿の母君をば御萬の方と申し駿河にて塙団
右衛門が名を聞き大剛の士なりと思ひ太刀刀を賜はり
さて〻常の事なりて大将の宝とも思ひ士に成てゝ
鏡墓金とて毎年五百兩賜はりしを中を二百兩分ちて塙が
流落せし内に與へられし事あり時に剛の者一人もいとまり
き子ふたりのこせんといとまをこひしとや

○奥平の長臣奥平源八傳八父の讐同姓隼人を討ふ相與せ
ず士多し源八幼くして奥平の家を立去し一味の面々も
皆立去る源八が成長を待居る其中に一人の士妻八稲葉丹後
守正通の家の士に女にて有るが父の讐に預け置ふ頃て
讐討べきよし及びて妻の申ふ行て存る旨のあるべ離別す
なりいづ方にても嫁し給ひ親の苦労に成るべきなれといへば
妻彼妻申すに年久敷隔たりたる所に俄に仰れ候
めく故有べし然るに親に向ひ申ふ

いふべき詞もなかりけりといひければ今ハ何をかくして誠ハかやうの子細にて讎をとらんと組しかれバ其時ハ討死さするか又ハ公の咎によりて殺さるゝか二ツの間に有べし汝ハ八年若き人の我死後に艱難をへられバいかほどかくてかくの如くいひつると語りければ彼妻かなしみのあまりより髪をふつときり讎打もらしなば相見まじと此髪いろひやさじと誓言して別れけるとなり其後讎討おほせて彼士も散々に働き助太刀して彼妻のありかに行く對面しけるにかなしみの間より髪の長く出てことにかなしひハ其まゝなりしとぞ

○越前忠直叛志ありと世に聞えし比加賀の前田利常ハ隣國なればまし軍の支度せしまゝしに物具ともに乗るべき馬など撰ぶに加賀の領國の中に二千疋にあまれる中にて富田越後が馬を撰出だし鹿毛にて二寸五歩あまりて駿馬なり大庭に旗数百本立並べふせつたてゝしく金鼓を鳴し鉄炮をとらしにも少しも驚かね名をバ優婆塞とぞつけられきたり今二匹とて撰だれしに似る馬もなかりけり

凡大将の馬を撰ぶに心得有べきにや甲斐の武田の家にて米沢といひしもの奥州に行く馬を求る時信玄一首の和哥をよみて与へらる

上駒の中にもなんてこそ大将の乗べき馬と恋まされものゝ

信玄五十疋の馬の中に軍に乗まし馬四足栗毛中段とて只二疋あり甲斐山梨郡といふ所の百姓此四足之を

やしなひ置しを宋沢見て文ある馬と信玄に申て五十貫の地を与へて此馬を信玄に奉る今泰平久しくなりて馬を擇ぶの理を知る人なく益なき観の美に黄金を費す事に成めるなり是れ上より下にいたるまで軍旅に明らかなるが故なり

○池田の長臣森寺秀勝ハ伊勢の赤堀郡萩の城主なりしが伊勢北國司に攻落されて藤左衛門秀勝其比幼なりしを母抱きて落て尾州織田信秀のもとにかくれ居たり護國公（池田信輝朝臣）の母君を養德院といひて江州より落ぶれて清洲に来たりを藤左衛門瀧川一益に頼て信長の乳母に出せり信長　護國公と同年なるゆゑ遊び相手となりぬ

年をおくまたり故有て　護國公出奔せしの時森寺も同じく打つれて赤堀に隠れ居る事五年に及へり かゝる信長星霜の城を攻られ森寺の領国の体おのれ清洲の城に居よりて物具を求むべき支度せんやと存れども金も銀もなくぞあはれ叶はぬ事なりと　護國公の母君に潜かいはれば我も金銀のあるべきにて此なりともとて綾の小袖三ツ出しぬ森寺にあるへらる森寺いそぎ出て銀銭六十に換て古き物具を買ぬれども冑なれば苗ぬく深さ布を鉢巻なりく星霜に向ひ出しぬ信長悦ぶ　護國公をもめでぬ

佐々成政の藤左衛門子を政右衛門と云ものあり老て政右衛門忠勝十八歳の時いづまれ所にて有しやとぞ　護國公

の前ふ有り時稲葉伊豫守一鉄のかたより備前の陶にてこと
を贈られたり政右衛門見て是ハ賣物なりけるぬものとたぞう
て豫州さぞ笑ひんべー悪き奴ことをいへあれ伊豫守ゞ目の
前ふく打砕きたまへバ快くいんべーとい
礼あり豫州ゞ目の前ふく砕くべくいハくぶいんよとの詞をかけ
より座を立くとりを懐に入伊豫守の方ふ行きうかゞまと
ハたゞ對面せられしよ政右衛門ことを取出し備前にて焼
たる茶ハ賣物なるまバ必ずしもといふもあへぬ柱まあ
て打砕きつと考出るまバ一鉄それとぞめよと下知をれふ
かけのびく帰アとり　護國公ハ政右衛門ゞ性ひ一定
伊豫守のりふく打砕くべー危き事なりとて門内ふ待ひ

護國公汝ゞ詞毎

しふ帰アとり考りたるまたまハ此なりとてとりのかゞ
たを取出し見せて後申さるハ凡君とある身ハ一言も謹
あるべき事なれ先ヨセ詞ハ無礼なれど砕くべくいくぶいて
んとたりあひをかけしまき若き男の骨をきぶきりたるもさて
やんべきや道を得く帰アたるハ幸なり已後を謹みへといひ
たり政右衛門美濃の竹ゞ鼻ふ居し比木全又藏といふ士ゆり
有く森寺ゞ内ふ居しより
又藏ゞ父ハ五右衛門とて大剛の者なりしる或時野伏一揆し
たるふ木全ゞ内ふ引け入りしハそれハいふと問ふ中へんふ
かまへんと答ふたゞるく一揆のうち通りたる所を山の上より
ごろとおいしく突てかりたるば小勢を大軍なりと思ひ

一揆さんぐゝに敗北しそれバ木全が鉄ふく中へんに かくるゝと
世ふいくれ〳〵人なり
政右衛門又藏と心を合せ同國高木何某を討んと計ひ又茲
竹ゞ鼻の竹林に かくれ待〳〵ふ高木夜中に打ゝ出るを老ア出
て唯一鎗に突殺し後者ども追ち〳〵にてゝ高木ゞ子二人父
の仇報いんと呼ゝふ政右衛門或年江戸に行ゝ時荒井に宿せ
敵道に待ち関く舞坂に行道の程三十間ばかりも毛ゞて九
八百人計待ちけるゝふ政右衛門ちづ〳〵と乘通りしふ敵更に
ゝうあらばバ政右衛門従者五六人ゆく馬を引ゝ仇の前に無
行見に待ゝる八高木ゝ森寺を仇まてゝうんとや
唯今何とてうちゝいねぞやさゝバ多ゝうありんと大音よりへども
物いふ人なし政右衛門あざ笑ひ討ハぬぞや此後我をゝう
とハ存もよりゝまゝと罵りて打過江戸に趣きゝ高木ハ訟へて
政右衛門を討んとやゝられバいづくまでもあれ討ゝへと許されゝ
又政右衛門ゆもきびゝ防ぎをして仇ふゝれざるをりて勝に
せよゝの事なりゝれバ常ふ鉄炮五挺に火縄ふ火をつけ弓十挺
に箭を関ひさやをづゝる鎗五本士三十人ゝち連ゝり秀吉の
時出仕しゝるゝもかくのめゝ刀をも殿中ふ携へよと許さる伏見
の城を築ゝれし後諸大名出仕するゝふ政右衛門よゝふハ出仕せべ
ゝゝゝ仇の必窺ふべきゝといひしゝども政右衛門ゝゝもハバ
ゝて出仕して秀吉の居間ゝ次まで刀をいつも携へるまゝとも
其日ハ従者ふゝゝせ置ゝく廣間に仇の有ゝる中を打通りく

事故あり退出して後慶長四年四月小参河にて病死しぬ

○國清公（池田三左衛門尉 参議輝政卿）世を下らせらるゝ時伴玄札ハ寵たりしに付必殉死すべき者なりと人もいひけるを　奥國公（武藏守利隆朝臣）聞よく心を付よく侍臣を仰られ御柩をはこばせらるゝ日其次の間なりしに玄札ひきそれを入又閉るをあやしみ見るに脇差をそや腹に突立てるを抱おろし人多く重なりておし留るかくとかくるまゝバ　奥國公急き御出ありて玄札いかゝと仰らるゝにバ玄札兼て御恩深く蒙りしへバ御供仕りたく志なりてかゝ見つけられしハ口をしく御ゆるされをもて快く死出の道に赴きたべしと申上るを聞て名さもあるべき事なりされ

ども我主の主にハ成ぬ我を見すて先代の供をせんにハ人に見せ恥も玄札ハ先殿の志をと知り寵愛に遇さる身のよくく今の嗣ハ劣り給ふ友供しく死しるなんといふんにハ今までの士一人と我に心服せる者あるに我ハ獨夫と成て人目前なり我を獨夫にもなすくそれを忠とも義とも思ひなんにハとく死しく御供やべし強く我お留むべきや我ハ故ぬ死ぬる依く士の主にハ成る事なりしに只とく死ねと仰られバ玄札涙を流し存ぬ仰を兼て偽に進退究たれと申せバ　奥國公とく死しく我を獨夫ならしく先代への奉公とせよとく再三仰らるゝにバ玄札とくいそで暫あり

そゝぐ仰の趣兼てひぬ士なりの者ぬ刀を腹に突てあらら

さて止べきふハいなれども只今の御詞よりく恥をきのびく
人ゝ後指をゆびれいともなるべく人麻呂べしとやそまこばさてハ我
士の主ゝなる事を得るゝ汝が忠義比類あるべくびよくいる
くくくと仰らまこ内ゝいくせまひそり

○池田の家ハ士大将番大膳景次ハ父を藤左衛門景元とゝ尾張
智多郡蒔尾とゝ所の人なり大坂冬の軍尼ケ崎の城ゆく
片栩ゞ兵ども討まこを援ハざるよりゝ心ありと　東照宮
粉くゝ思召よ一ゞそくゝば其子細を申述んが為使を遣ハ
べきよ雑うよく使せんと各使を擇び其姓名をまこて出べき
旨　奥國公の仰ゝより数百千の士半をもく大膳ゞ姓名を
ちくくて出ゝ　公自ら書記させるゝも同ドくれバさくば

ゝて西宮の陣所ゝて大膳ゝ仰付らる
大膳　公の御前を退き出ゝ時長臣ゝちを始とゝていや
ゞ上ゝ重ゝくゝ所を通らんとすくゝ伊木長門大膳ゝ向ひ
今度の使ハ大事なりよく心得られしやといひゝ大膳不才
の身粗仰の旨ハ美うゝひあ此をといまくに懐よりゝ九す
ばうゝ七首の氷ゝくくゝるを抜出ゝ見くるとぎあて
ゝ　大御所の御座近くまうくゝゝよりゝ外ハ存らそば
といひくまこバ長門左なりゝ我行屋ゝとゝひゝふかくのぬく
なまこバいくべき事なくくといひくを
二條の城ゝ参くくまこバ　東照宮の御前ゝ召まこく子細を紀
させくゝゝ一ゞ道理明らにゝ御聞ゝ召入らるべき

氣色なくてくるしきバ尼ケ崎の地図を取出し武蔵守露塵ばかりも二心なくよくをやせしバ其時疑ひ思召さるゝよし仰出さるゝ退出して人〻再三押返し詭ひきゝて武蔵守罪なきよくをやせしゆへ格類少き者なりと感じあゝしよ

東照宮も其後大膳の事をもゝしき者なり城よ豪傑とは大膳あるべしと仰せかゝり

大膳はめみ髭あるゝ容儀もゝしき人なりしバ退出して髭よくもいひとりと仰らまし其座に有り一人くも御妾関よ出くおろり且ある人よなりとなり

番後禄千石を賜ハり又後千石の禄を増賜ばり

芳烈公松平新太郎光政朝臣の時ふ至て政を執り寛永十三年七月六日病ぐ死て

常山紀談巻之二十三終

国立公文書館
National Archives of Japan